

あたらしくはいった本 (令和3年7月 貸出開始資料から)

- 小説 仮面(伊岡瞬/著) 朔が満ちる(窪美澄/著) 我が産声を聞きに(白石一文/著) 一夜の夢(佐伯泰英/著) 遠巷説百物語(京極夏彦/著) 婿どの相逢席(西條奈加/著) 長い一日(滝口悠生/著) あなたにオススメの(本谷有希子/著) 万事快調(波木銅/著) 零の晩夏(岩井俊二/著) 医学のつばさ(海堂尊/著) 海神の子(川越宗一/著) 神よ憐れみたまえ(小池真理子/著) 飢渴の人(エドワード・ケアリー/著) ボドキン家の強運(P.G. ウッドハウス/著)
- 随筆・詩などの文学 アガワ流生きるピント(阿川佐和子/著) 南の風に誘われて(椎名誠/著) シルクロード(安部龍太郎/著) 人生「散りざわ」がおもしろい(下重暁子/著)
- その他の本 きちんと伝える全技術(唐沢明/著) きっと誰かに教えたくなる蚊学入門(一盛和世/編著) パスタの本(有元葉子/著) ダーニング刺繍(ミムラトモミ/著) 依存症がわかる本(松本俊彦/監修) ピラティス大全(菅原順二/監修) 沢登り(山と溪谷社/編)



『仮面』
伊岡瞬
KADOKAWA



『朔が満ちる』
窪美澄
朝日新聞出版



『飢渴の人』
エドワード・ケアリー
東京創元社

●新型コロナウイルス感染拡大防止のため、来館の際はマスク着用などのご協力をお願いします。

みんなの としょかん



市民図書館

TEL (921) 4646

FAX (921) 4896

<http://www.library.dazaifu.fukuoka.jp/>

としょかんカレンダー

令和3年	日	月	火	水	木	金	土
9				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30		

○のついた日は休館日

金・土曜日(祝日を除く)は午後7時まで開館しています。

江戸時代のワクチン接種

宮浦(福岡市西区)で荒物屋を営んでいた津上悦五郎が遺した、江戸時代末から明治にかけての記録『見聞略記』、文久2(1862)年の項には次の記事があります(高田重廣校注『見聞略記 幕末筑前浦商人の記録』)。

当冬、所々痘瘡(天然痘)流行いたし、兼て植痘瘡致し居り候わば、殊の外手軽く、

近村も飛び飛び流行いたし申し候えども、植痘瘡

の故にや広がり申さず候

「植痘瘡」とは種痘(天然痘

ワクチンの接種)のことで、この年の冬に天然痘の流行が見

られたが、種痘のおかげか蔓延しなかったと伝えていきます。この

記述から、当時すでに浦の一人商人が種痘という医療法を認識し、その作用を感じていたことが分かります。

当時、福岡藩では黒田長溥の治世下(1834年家督相続)、領内で種痘の普及が目指されました。種痘といえはその祖とされる秋月藩医・緒方春朔(1748-1810)が浮かびますが、国内で主流となっていく



～公文書館だより⑧～

のは彼が用いた人痘法(患者から採取した瘡蓋を砕いて鼻孔に付着させる)ではなく西洋由来の技術である牛痘法の方で、福岡藩でも西洋技術の導入に熱心だった藩主・長溥が登用した医師・武谷祐之(1820-1894)により牛痘の接種が広められました。

太宰府では、在村医・中川昌沢が安政3(1856)年

に太宰府天満宮社家中の「種痘之医」を担当することを藩

に許可されました(『太宰府市史 通史編Ⅱ』。中川家は

代々太宰府で医師を務める家系で、昌沢は福岡藩の内科

医や京都の古方派医に医術を学んだ後、太宰府に戻り村の「掛

医」として診療を行っていました(『太宰府人物志』。当時種痘は、地域の医療を最前線で担っていた医師たちによっても徐々に進められ、巷でもその効果を実感されるに至っていた、ということが窺えるのではない

でしょうか。

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子

太宰府市公文書館 藤田理子